

2026年度 愛知県コミュニティ・スクール・地域学校協働活動研修会

【子どもを支える仕組みA】

「高等学校・特別支援学校における 生徒を支える仕組みについて」

2026年 7月 21日（火）10:20～
On-line 講 義

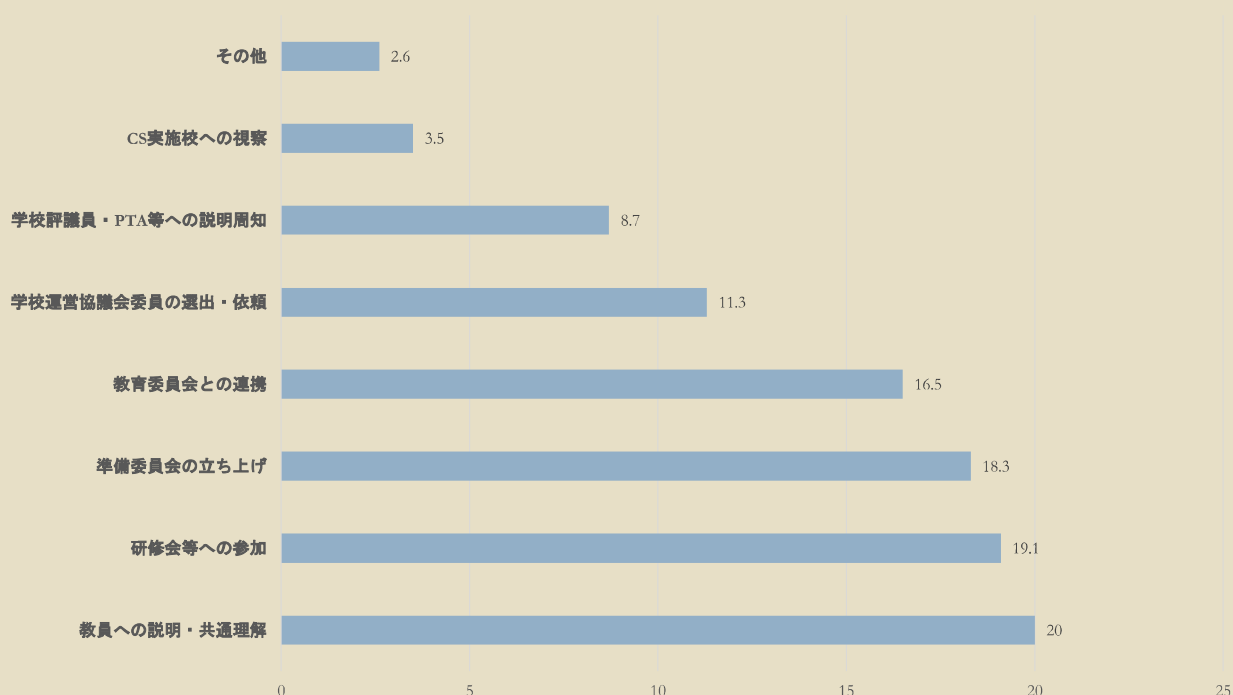
コミュニティ・スクールをどうするかでなく、 まずは、子どもの課題を教職員の中で熟議し共有すること

- コミュニティ・スクールは、今日の子どもの課題を解決する一つのツールである。
- 高等学校は普通科・専門科・総合科等様々な校種があり、特別支援学校も盲聾等、障害の状況により学校のスタイルは様々で異なる。
- 高等学校や特別支援学校は、立地条件や先生方の「地域」という概念が、小中学校と比べ、意識は高いとは言えない。
- 今日の世界情勢は、少子高齢化・人口減少・多様化・今日までの教育団体の弱体化・ITによる情報社会が人を繋ぐ機能を衰退させ地域コミュニティが崩壊状態にある。
- 子どもたちは、日々、学校の教員、家族・親戚、SNS程度の関わりはあっても、様々な社会を構成する大人と関わる機会が極めて少ない。
- 今日の子どもの課題は、学校だけでは解決しきれない現状も多々出てきている。
- * まずは、先生方の子どもの課題を考える視点を様々な方面に向けてみる

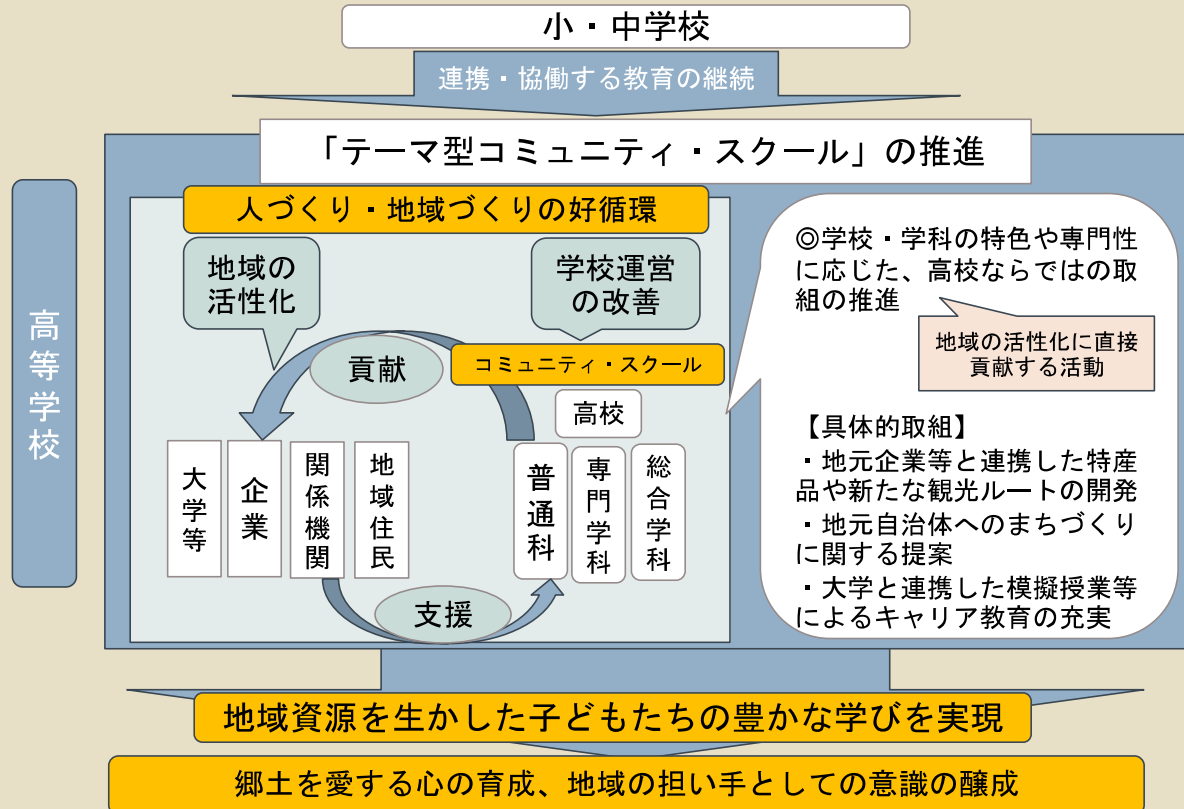
高等学校・特別支援学校のCS推進の課題

- 地域連携の取組への負担感
 - 教員の学校の課題は学校で決め、外部の価値観の導入は必要ないという考え方
 - 学校運営協議会が学校評議員会と同じレベルで、学校の協議会運営のノウハウがなく、委員の「当事者」意識が育たない
 - 働き方改革と、取組への負担感、多忙化を感じている教員が多い
(校内の地域連携担当教員の負担が多きこと。反面、子どもたちの学習意欲・学力向上に繋がりにくいとは考えていない)
- CSの認知度の低さ（地域という概念が教員には捉えにくい等）
- 教員の異動による活動の継続の難しさ
- 取組の成果のわかりにくさ（Researchの必要性）
- 活動時間の確保（教育課程上の取扱方等）
- 地域の弱体化による、人材不足、予算不足
- 学校行事や各教科とCSの関係性が薄い
- 各教科の授業が、子どもたちの主体性・協働を高める授業になり得ていない

これからのCS推進に必要なこと

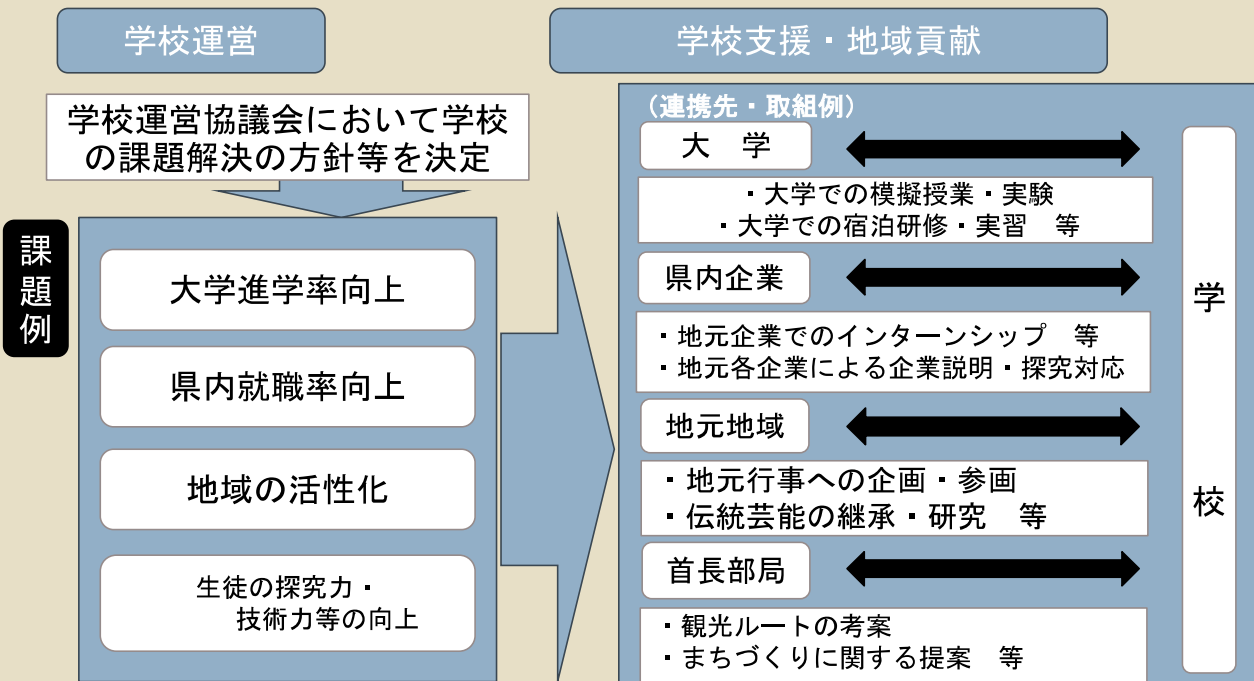


地域の活性化や地域課題の解決に向けた拠点としての コミュニティ・スクールの機能の一層の充実



高校におけるコミュニティ・スクールの考え方

テーマ型コミュニティ・スクール



CS推進の「ビジョン形成」について

- ・学校は、CS推進の短期・長期のビジョン形成は出来ているのか。
学校教育目標・スクールポリシーをかざしているだけに過ぎないのでは？（**何処の学校に転勤しても、自分の専門分野しか関わろうとしない教職員の増加が気になる。また、担任をしたがらない教員の増加も！**）
- ・地域・保護者にも理解出来る具体的な「**行動できる目標**」を！！
- ・「熟議」で学校・地域が分担した「行動目標」を共有、それぞれが当事者としての役割が決まっているのか。（学校運営協議会委員は、意見やアイデアを貰う人でなく、協働者である。**学校評議員会の空気から脱却**）
- ・CSと新学習指導要領は一体化していることを踏まえて、短期・長期の年次計画及び**学年による段階的推進計画**が出来ているのか（5年後・10年後のCSのイメージはあるのか）

教職員のチーム力は備わっているか？

*教職員全員で『熟議』を実施し、**子ども達につけたい具体的な力**を共有できているか。

*『**総合的な探究**』や『**カリキュラム・マネジメント**』とCSとの関係性は、一体化しているのか。

小中学校のCS調査から「学びや課題」

- ① 地域の特性・特色を生かした学校と地域の協働による子ども支援体制づくりが行われていること
- ② 地域連携担当教員や地域コーディネーターを窓口とした地域連携の取組の校内体制が構築されていること
- ③ 学校の組織としてのマネジメント力が発揮されること

高校で地域との連携による学習を行う意義

「地域の差し迫った課題を、高校生自らが地域と協働して解決していく地域課題解決型学習を実施するなど、高等学校と地域の双方向的な魅力を発信することにより、これからの時代に必要な生徒の主体性や協働性の育成に資することも期待される。」また、「生徒が地域にあるさまざまな産業や暮らし、地域の課題や魅力、未来に対する探究を深められるがあることは、教育の観点だけでなく地方創生の観点からも重要である。」・・・

【校長】重要なのは理解できるが、生徒も教師も「地域」という概念が広域であるため稀薄。さらには、地域の現実や価値観を把握する教師がいない現実。・・・日々地域で活動する教師の少なさ。育てるしかない！

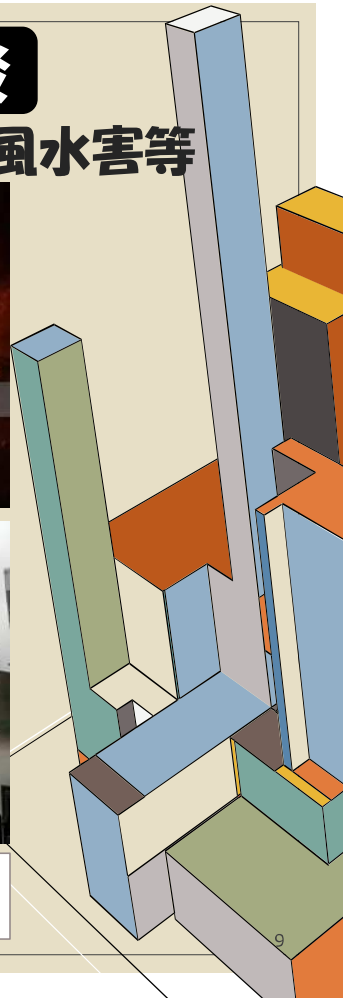
何時発生するか不明

防災

不安な地震・火災・風水害等



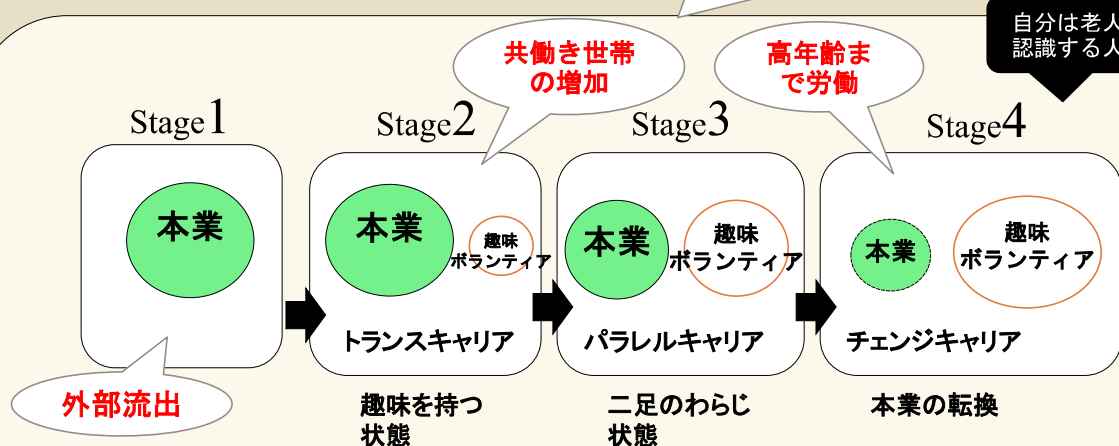
世界のどこかの国が混乱すれば、日本社会にも大きな負担が！
そして、私たちの生活にも大きなリスクがかかってくる。



～第1の人生から第4の人生への変遷パターンが大きく変化～

人の一生が大きく変貌しているのに、同じ体制を維持しようとしても、人は集まらない
社会の多様性や、価値観の変化を的確に受けとめる

自分は老人であると認識する人は少ない



◇Stage4に到達することが人生の目標ではないが、S4の状態になるためには、S2.S3の経験をする事が求められる。

◇Stage2は、本業である程度の経験を積み、自分の身辺が落ち着いてきた状態である。

◇Stage3は、ある人は本業と趣味・ボランティアとの間で最も葛藤に陥りやすい状態であり、ある人は両立している。

時代や年齢による 地域の人々との(老人クラブ)の楽しみ方の変化



様々なテーマコミュニティの集合体としての老人クラブ（年齢で区切ること無く斬新な別名が必要かも）



「地域コミュニティ（ローカルコミュニティ）」 と「テーマコミュニティ」

。コミュニティの分類

目標が明確でないも
のは減る傾向

地域コミュニティ（地域性あり）

その他のコミュニティ（地域性なし）

地縁団体

特定目的のためのアソシエーション（機能団体）

現実空間

地域毎・特定目標なし

自治体 **激減**
婦人会 × 青年団 ×
子ども会 **激減**
PTA **激減**
老人会 **激減** など

地域毎・特定目標あり

地域づくり委員会
地域防犯・防災組織
地域子育て支援グループ
地域消防団
お祭り実行委員会 など

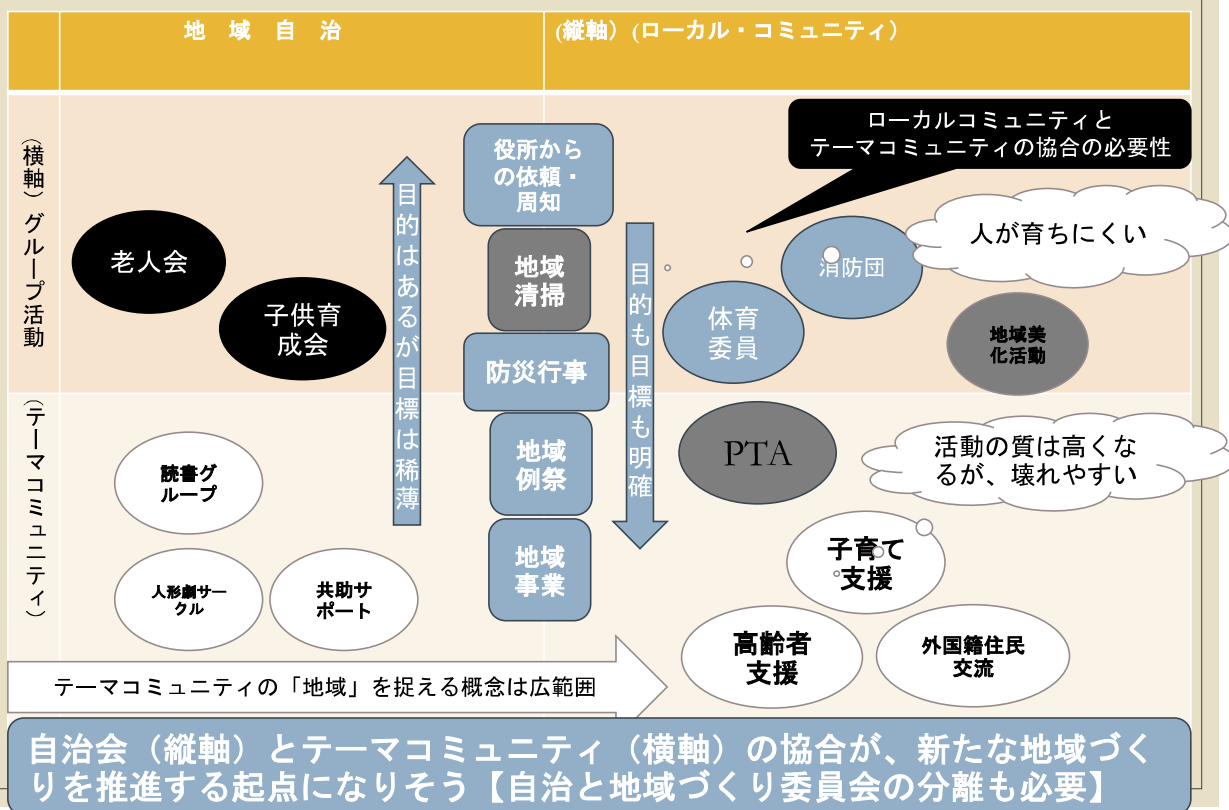
地域とは関係なく、特定目標あり

スポーツクラブ
語学・読書サークル
動物愛護団体
福祉ボランティア
子ども支援ボランティア など

バーチャル空間（ネット社会）

益々増幅する多様化社会

これからの自治や地域づくりのあり方



地域の女性の声

【問い】地域づくりに何故女性は参画されないのか、または、参画出来ないのか。

- 今日の家庭の経済力維持は共働きが基本。さらに女性は、子育て、家事、介護と、一生を通じても負担感は大い。共働きでなくてもフルタイム業務の家庭生活で女性が自治会を担うのは難しい。
- 以前に、自治会評議員を頼まれたことがあったが、評議員会そのものが、男性の価値観で創られた組織なので、女性には難しいと感じ1年で辞退した。
- 自治会の組長会に主人が仕事で出席出来ないため、私が代理で出席したが、出席している女性の中にまで、「女性は反論及び建設的な発言はしてはならない」「おしとやかが基本」という空気が蔓延していた。
- 30年程前であるが、ママさんバレーの普及が叫ばれ、自分も参加したが、自宅も周辺地域からも「あそこの若嫁は、夜遊びをしている」と噂されたのを記憶しているが、地域における女性の立場は当時の位置とあまり変わっていないように思う。
- 近年、ネット社会も進行し、地域の限定は出来ないが、子育てや高齢者支援等、同じ趣味や考えを持つ女性グループ等が増加していることは確かである。
- 男系社会で創られた自治会のあり方を根本的に考え直す時期ではないか。
- ジェンダーバイアスやジェンダーギャップは、女性の人生の選択肢や可能性を拒み、剥奪にも値する。地域任せになるのではなく、行政も啓発のみでなく、改善ルールを構築して欲しい。(2023年度地域人権学習会での意見から)

ジェンダーバイアスとは：人や社会が無意識のうちに性差や男女の役割、そして性的マイノリティなどの人々について固定的な思い込みや偏見を持つことである。

ジェンダーギャップとは：男女の、違いにより生じる格差のことを言います。

若者の自治会に対する印象

【自治会の印象】

- 自治会自体が何を目標にしているのか分からない
- 何をしているのか分からない
- 両親が何か活動していたが面倒そうだった
- どう考えながら地域のことをやっているのか、大人の”地域への想い“が分からない

【自治会との関わり】

- ほぼ全員が『小さい頃は、子どもクラブや運動会、お祭りに参加していたが、中学・高校生くらいから部活などが忙しくなり参加できなくなった

【自治会活動への参加の可能性】

- イベントの手伝い等はやってもいい「面白そうだから」「触れ合うことが楽しい」「地域が好きだから」・・・「**手伝った分だけ対価もある**」「強制されなければ」「自治会は高齢者ばかりで気が引ける」「若者が活動しやすい環境づくり」「自分たち**同年代で企画・実践**できたら」「参加の**自由度**」「**互いに認め合い、尊重しあう関係性**」

若者が市民活動に参加しない理由

- ①活動する時間がないから42.3%
- ②活動についての情報が得られないから36.1%
- ③体力や健康に自信がないから23.2%
- ④関心や興味が持てないから19.6%
- ⑤一緒に活動する仲間がいないから17.8%
- ⑥金銭的な負担がかかるから8.0%
- ⑦活動する場所がないから6.7%
- ⑧その他6.7%
- ⑨特になし4.1%
- ⑩無回答2.3%

地域の子どもの活動の弱点は？

- ●招待型活動：なんにもかも大人たちが準備
- ●打ち上げ花火型活動：面白そうな行事を大人が用意
- ●帳面消し型活動：一年交替の役員が去年をまねて実施
- ●おもらい型活動：お菓子やジュースで子どもをつる

子どもたちは、おいしい・仲間が居るから等、楽しいだけで参加しているが、大人主導の事業で子どもは育つか？【魅力的な大人との出会いはあるのか？】

様々な学ぶ力の格差がある子どもたちに必要なこと

- 認知能力から「非認知能力」の獲得へ
- **認知能力**：外界から得た知識や情報を理解し、記憶し、考え、判断し、問題を解決するための知的な能力の総称です。知覚・注意・記憶・言語・思考などの働きが含まれ、学力テストやIQなどで測られることが多い
- **非認知能力**：テストやIQでは測りにくい、感情・意欲・対人関係・行動の特徴など、学力以外の内面的な力の総称です。自己コントロール力、やり抜く力、協調性、自己肯定感などが含まれ、生涯の学びや仕事・人間関係の土台になる力として教育やビジネスで重視されています。

人口減少社会における地域づくり・まちづくりへの6つの提言

【提言1】**変化に柔軟に対応できる地域づくり** 人口減少・高齢化社会においては、これまでの社会と異なり、地域の人口・世帯数や年齢構成、個々の世帯の家族構成等が、大きくまた急速に変化していく。そうした変化に対応して、住・生活環境なども柔軟に変化できるようにしていく必要がある。特に住宅の循環利用・転用などの可変性が求められる。

【提言2】**「共助」を生かせる地域づくり** 住民数が減少し、高齢者が増加していく中では、住民同士の「共助」の役割がますます重要になっていく。住民の健康を守っていく上でも、生きがいのある生活を送っていく上でも、「共助」を生かせる空間づくりやシステムの設計が求められる。こうした努力により、真の豊かさを享受し続け、信頼と「絆」によって結ばれたコミュニティが維持されていく。

【提言3】**ハードの整備だけではなく、プロセスを重視** 変化に対応し、「共助」を生かせる地域づくりを進めていくためには、住民が主体的に地域づくりに取り組み、自律的にコミュニティを維持していくプロセスが重要になる。こうしたプロセスに住民が参加することにより、自らの地域づくりに納得・合意したうえで、「共助」に積極的に参加し、人口等の変化に柔軟に対応できる持続的なエリア・マネジメントが実現できるようになる。

【提言4】**プロセスを円滑に進めるための事業主体** プロセスが円滑に回っていくためには、これを進めていく事業主体を適切に確保していくことが重要である。多くの場合、行政だけでなくコミュニティ・住民が主体として参加していくべきであろうし、NPOや学校、協力企業や外部から招いた人材など、地域の実情に応じた適切な参加者が、住民の主体性を尊重して、地域づくりを進めていく必要がある。あわせて、プロデューサー人材、コーディネーター人材等の確保・育成を図ることが不可欠である。地域づくりの実績ある優秀な人材をデータベース化し、一元的に提供することも有益ではないか。

【提言5】**トータル・サービス、ワンストップサービスの実現** 高齢化が進む中で健康で生きがいのある生活を送っていくためには、「共助」が生かされるとともに、縦割りでない、地域や住民の目線に立ったサービスが提供される必要がある。医療・介護などの地域包括ケアや諸サービスのワンストップ化・連携の強化等を進めていく必要がある。

【提言6】**「身の丈にあった」地域づくり** 人口減少社会のもとでは、過剰な投資は現在の住民の負担を重くするだけでなく、縮小する将来の世代に、過大な維持・管理や更新、廃止のコストの負担を強いることになる。コンパクトシティに向け、将来を見据えた適切なまちづくりをしていく必要がある。既存の施設・設備についても、柔軟な発想で転用等を工夫していく必要がある。

地域で「共助」の関係性づくり

気がついた人から地域で動き始めないと
若手や行政に期待しても困難
忙しい社会だけど、時間を上手く使う習慣も大切

認知症や高齢による障害は決して恥ずかしいことではありません。
近所で共有し共助の地域づくりを！

話し相手・電球交換・買い物・精米・ゴミ出し・衣類の整理、
病院の送り迎え・健康チェック・畑、植木への散水 等々

ちょっとサポート

各家庭・各自の出来る時間・内容・繋がれる範囲で、自分たちが出来ることをしていきましょう。

外国籍の人々の生活課題

地域における日本語指導



ブラジル料理と日本料理で交流



外国籍児童・生徒の進路相談



・1989年入管法「出入国管理及び難民認定法」の改正
日系外国籍の人々の流入
・2019年新しい在留資格
「特定技能」の創設
技能実習から特定技能への移行が可能になったことで、母国に帰らず引き続き働いてもらうことが可能になりました。

○2024年生産労働者不足による入管法の改正：技能実習制度は2024年以降に廃止され、新制度である「育成就労制度」が新設される見込みです。

また、特定技能取得により、定住及び家族も同居出来る思案もスタートしている。

愛荘町在住外国籍住民が1000／20000人が、3000／20000人になることも十分予想される

豊かな関係を創るためには、先ず、自分が変わる コミュニケーションの基本

コーチとは？「Coach=馬車」

【コミュニケーションの基本技術】

- **「聴く」**：先入観を持たない。相手の話が終わるまで口を挟まない。相づちとうなずき。相手の語尾をオウム替えしをする。相手の雰囲気、話し方に合わせる。
- **「質問する」**：過去を問いつめず、「次からどうすれば出来ると思いますか」と未来型質問で。混沌としている思いや考えをほぐす。

相手の話や思いを整理して確認する

- **「承認する」**：相手日々の言動や強みをほめる。相手の存在を認める。
- **「リクエストする」**：決めつけるようなメッセージは避ける。伝える前に「聴いてもらえますか」と許可を得る。また、一つの回答を伝えるのではなく、いくつかの「選択肢」を提案する。

いくつかの選択肢を与える

特別支援学校におけるCSの意義

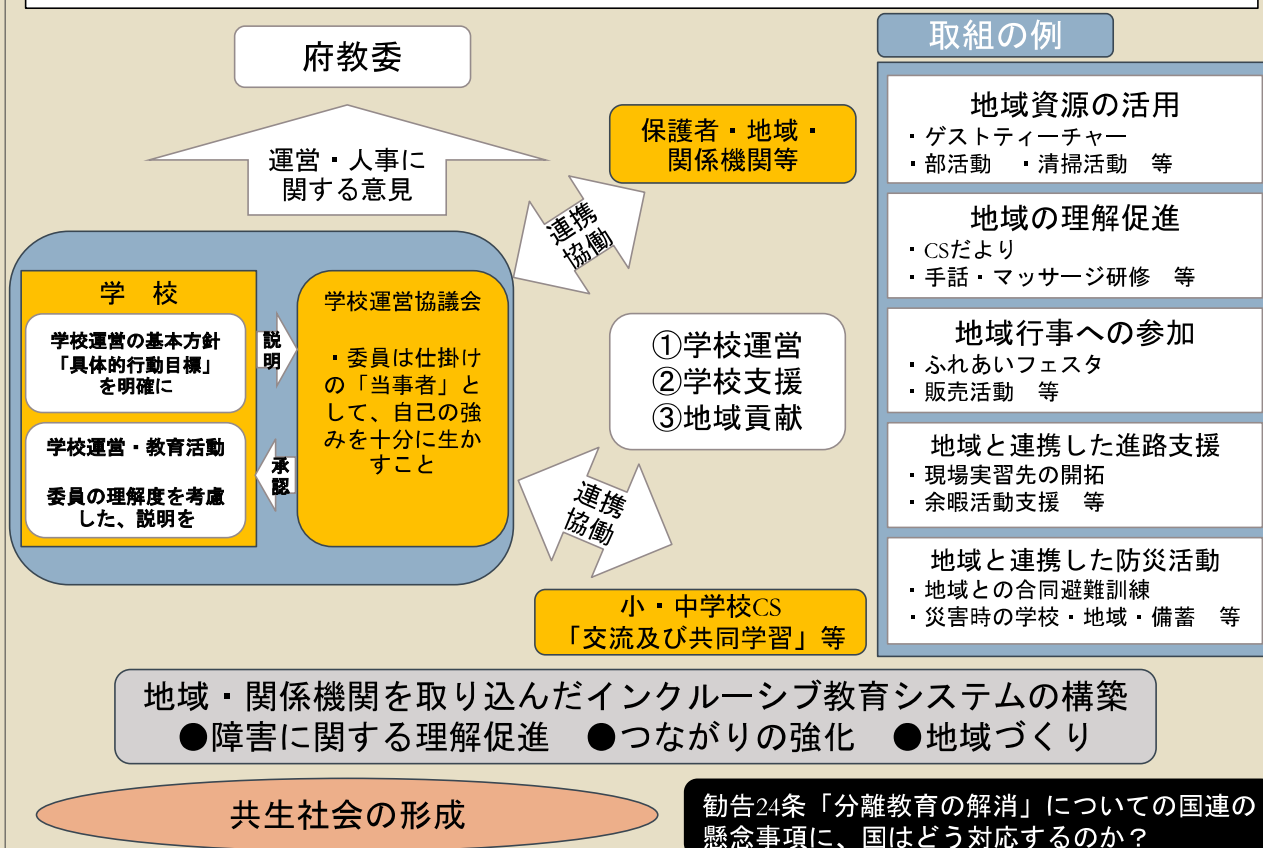
- 障害のある子どもが、その能力や可能性を最大限に伸ばし、**自立し社会参加**することができるよう、医療、保健、福祉、労働等との連携を強化し、社会全体の様々な機能を活用して、十分な教育が受けられるよう、障害のある子どもの教育の充実を図ることが重要である。
- 障害のある子どもが、地域社会の中で積極的に活動し、その一員として豊かに生きることが出来るよう、地域の同世代の子どもや人々との交流を通して、**地域での生活基盤を形成**することが求められている。このため、**可能な限り共に学ぶことが出来る**よう配慮することが重要である。
- 特別支援教育に関連して、**障害者理解を推進**することにより、周囲の人々が、障害のある人や子どもとともに学び合い生きる中で、**公平性を確保しつつ社会の構成員としての基盤を創っていくことが重要**である。次代を担う子どもに対し、学校において、これを率先して進めていくことは、**インクルーシブな社会の構築に繋がる**。

特別支援学校におけるCS推進課題

障害のある子どもたちが地域での生活基盤が形成できる

- 小中学校における「地域」概念と特別支援学校における「地域」概念の違いがあり、特別支援学校の「地域」の広範さや多様性が取組を難しくしている。
(障害種別の違い、交流及び共同学習の推進、職業教育や進路指導の充実、医療や福祉、労働等の関係機関との連携など、求められる役割が多岐にわたっている。)
- 通学区域の広範さから「学校の所在する地域の住民」をどのように規定するのか、特別支援学校特有の「地域」事情がある。
- 教育委員会の意向で設置されたCSが多く、校長の意識上の課題や、「学校自身の意向＋保護者・地域の意向」(ボトムアップ型)の方が、「教育委員会の意向＋首長の意向」(トップダウン型)よりも「学校が活性化した」「児童生徒の学習意欲が向上した」「生徒指導上の課題が解決した」等の声
- 学校及び学校運営協議会のリーダーとして、5年～10年の推進ビジョンやストーリーの展望(条件整備含む)が持てているか。
- 「地域」の受けとめには困難もあるので、ローカルコミュニティの拘るよりも、テーマコミュニティも活かしていくことが大切かも。

共生社会の形成に向けた「特別支援学校コミュニティ・スクール」の取組



「共生社会」の形成に向けて、障害者の権利に関する条約4)に基づくインクルーシブ教育システムの理念が重要

① 障害のある子どもが、その能力や可能性を最大限に伸ばし、自立し社会参加することができるよう、医療、保健、福祉、労働等との連携を強化し、**社会全体の様々な機能を活用して**、十分な教育が受けられるよう、障害のある子どもの教育の充実を図ることが重要である。

② 障害のある子どもが、**地域社会の中で積極的に活動し、その一員として豊かに生きることができるよう、地域の同世代の子どもや人々との交流等を通して、地域での生活基盤を形成することが求められている**。このため、可能な限り**共に学ぶ**ことができるよう配慮することが重要である。

高等学部だけの問題ではなく、小学部・中学部からのカリキュラム・マネジメントの必要性！

③ 特別支援教育に関連して、障害者理解を推進することにより、**周囲の人々が、障害のある人や子どもと共に学び合い生きる中で、公平性を確保しつつ社会の構成員としての基盤を作っていくことが重要である**。次代を担う子どもに対し、学校において、これを率先して進めていくことは、インクルーシブな社会の構築につながる。

特別支援学校だけの役割ではないが、一つの大切な障害者理解のと地域との共生の発信基地として！

【特別支援学校と国連の提起】

国連の日本社会や学校を捉えるまなざし

障害者権利委員会から日本政府へ勧告（総括所見）

【24条 教育】

- ・**分離された特別な教育をやめる目的**で、教育に関する国家政策、法律、行政上の取り決めの中で、障害のある子どもがインクルーシブ教育を受ける権利を認識し、**すべての障害のある子ども(生徒)が、あらゆるレベルの教育において、合理的配慮と必要とする個別の支援を受けられるように**、特定の目標、時間枠、十分な予算で、質の高いインクルーシブ教育に関する**国家行動計画**を採択すること。
- ・障害のあるすべての子どもたちが、個々の教育的要求を満たし、**インクルーシブ教育を確保するための合理的配慮を保障**すること。

今日の日本社会は、障害を持つ子ども達にとって、閉塞的な荒野

子ども達も地域の自治を担う大切な一員！
「子どもが企画者」として。

子どもたちのP・D・C・Aで 地域の一員として参画・貢献



「高齢者サロン」
と
「ホタルまつり」



肖像権の問題で映像が小学校

子どもの生活・居場所は学びの原点、子どもたちの未来を支えるために、福祉の視点も踏まえた取組を

孤食・欠食・貧困児童を地域で支える（子ども食堂＋高齢者の居場所づくり）



フードバンクも
視野に入れて

コロナ禍以降等を踏まえ相対的貧困の課題を把握



「子どもボランティア」による高齢者サロン

10年後、20年後を見据えた、地域の次世代育成には、子どもの「主体的活動」や「協働」の力を育む必要性！



子どもが「納涼祭」の主役に

高齢化を体験し、みんなの工夫で生活を豊かに



高齢者・障害者が受けるリスク階段昇降体験



民生児童委員指導による「車いす体験」

自治会開催の車いす体験



子どもも含め、知識を得る「認知能力」だけでなく、体験や支援で得られる『非認知能力』の育成も

地域の運動会を障がい者との共生の場に...

誰も取り残さないSDG.s
地域と言いながら、誰か
忘れていませんか？



企画段階から地域の障がい者とともに

お一人様一回限りの人生！地域の小農（趣味）家が集まって、若者への農業指導並びに実益も含み楽しもう

子どもの農業体験



貸し農園と若い人とのコミュニティ



子ども育成組織との収穫祭



仲間と一緒に無人販売



地域で朝市開催



地域の一人ひとりの創造性が、みんなをワクワクさせ、その輪が広がる

スクールミッションの再定義

- 各高等学校が育成を目指す資質・能力を明確にする前提として、各高等学校の設置者か、各学校やその立地する自治体等の関係者と連携しつつ、在籍する生徒の状況や意向、期待に加え、各学校の歴史や伝統、現在の社会や地域の実情を踏まえて、また、**20年後・30年後の社会像・地域像を見据えて、各高等学校の存在意義や各高等学校に期待されている社会的役割、目指すべき高等学校像をスクール・ミッションとして再定義すること**が必要である。

その前に、教職員の意識改革のための専門性を離れた体験等の重視

～スクール・ポリシーの策定等への学校運営協議会委員の参画～

どんな事業を実施するのかではなく、

どんな子どもをどう育てるか？

（ 具体的行動目標の設定まで ）

これからの社会で求められる力

「主体性」：目的・目標は何かを徹底して明確にし、それを満たすために何をするかを自分で考え、リスクを承知で行動することができる。

「協働」：目標を達成するために、それぞれの仲間の強みを生かし合う。

「問題解決力」：批判的思考力・創造的思考力・協働的思考力

「批判的思考力」

必要な情報を取り出し、いろいろな観点から考え、自分の考えを筋道を立てて説明するための思考力

「創造的思考力」

情報を繋いだり、別の場面に応用したりすることで、問題を見つけ新たな解決策を生み出す思考力

「協働的思考力」

他者との共通点・違いを理解し、合意を得たりして、人と一緒に物事を進めていくための思考力。

おわり

ご静聴ありがとうございました。

【これからの学校・地域づくりに必要なKeyword】

- ①Research〈調査による客観的な地域データ〉
- ②Vision〈具体的行動目標：地域に必要な力〉
- ③System〈民主的な体制・運営組織〉
- ④process & Management〈具体的方策や活動〉